

神 野 光 男*



研究室における de Jager 教授

古い話で恐縮ですが、1960—61年の1年間、私がオランダのユトレヒト天文台でドゥ・ヤーヘル (Cornelis de Jager) 教授指導のもとに勉強させてもらったときの印象を書きならべて、同教授の人柄の一端を御紹介したいと思います。

私が難波取君 (現在ユトレヒト天文台に滞在中) とともに、ユトレヒト中央駅に到着したのが1960年4月5日の昼前でした。マルセイユからチッキで送った荷物受取りの交渉を、こちらは英語で、相手の駅員さんはオランダ語でやりとりしている最中、出迎えのドゥ・ヤーヘル教授とクッペルス助手に会えて、まづは地獄に仏の思いでした。

半年ほど前からの渡航手続きのための文通や、われわれを同教授に紹介していただいた上野季夫先生からのお話しや、はたまたあちこちの学会での写真から、われわれなりにドゥ・ヤーヘル教授のイメージを作っていました。あの白髪長身の写真からは、大分の年配の神経質な気むづかしい先生という予想をしていました。初対面のコワイ先生にまづどのように挨拶すべきか、前夜パリーからの夜行列車の車中、夜を徹して難波君と相談していたものでした。ところが先生は、昨日会った学生を迎えるようにまったく気さくにわれわれ2人の日本人を迎えてくれて、前夜からの緊張感が一度にはぐされる思いでした。荷物を手渡してくれた駅員さんに、日本交通公社定価表によって0.25ギルダー (25円) 銀貨のチップを渡すと、駅員さんは何やら不満顔でドゥ・ヤーヘル教授に話していました。早速、教授はチップの不足分を払ってく

れた様子でした。白髪の写真からうける感じとは反対に、若々しい発刺とした青年教授というのが初対面の第一印象でした。あとで分ったことですが、この白髪は日本流の老化現象ではなく、髪質そのものが生来白のでした。

タクシーで天文台まで案内してもらおう途中、「これがオランダで最高の建物のドム (教会の塔) だ」とか、「ユトレヒトは城下町なので細い道がくねくね曲っている」とかの説明をうけ、天文台に到着すると直ちにミンネルト台長 (当時) はじめ全台員への紹介、それがおわると台内諸施設の案内、学生食堂での昼食後は外国人逗留届出のための警察署への出頭、帰途は郵便局、食堂、繁華街の案内と息つくひまもなく連れまわされました。神戸を出帆してからの30日間、2万kmの長旅をおえたユトレヒトの第1日目に、目のまわるような早さのドゥ・ヤーヘル・テンポというものをまざまざと見せつけられました。

天文台のマイクロフォトメーターの説明をうけているとき、ある部品名を聞きちがえて質問したところ、ドゥ・ヤーヘル教授はわれわれの間違った英語を責めるどころか、「発音の間違いなどどうでもよい。君達と僕とで意味の通ぶる言葉を創作すればいい」といって笑っていました。その後はわれわれの「創作英語」を使って説明をつづけてくれました。また警察署への道中、今朝のユトレヒト駅での失敗を気にして、「私達はオランダ語の勉強をしなければならないと思うが」とたづねると、「オランダ語など天文学に何んの関係もないのだから、そんな勉強をする必要はない」と答えてくれました。(オランダ人は論文をすべて英語で発表していますし、台員は皆な流暢に英語を話します) こんな会話にも、合理主義的コスモポリタン、ドゥ・ヤーヘル教授の一面がうかがえるように思います。

その夜は天文台地下室の来客用寝室 (といっても、天文台は17世紀の砦のあとに建てられたもので、この地下室の小窓もその昔勇しい騎士たちが銃口をならべて外敵と戦ったあとなのでしょう) で一夜をすごし、翌朝まだ眼をこすっている頃 “How are you feeling?” とどびこんできたのがドゥ・ヤーヘル教授でした。朝の出勤はメッポー早く、台員の中でも一番早いことをあとになって知りました。

ちなみに当時のスタッフを紹介しますと、台長ミンネ

* 京大花山天文台

ルト教授、助教授がドゥ・ヤーヘルとハウトハスト、講師がヒューベネ、ドゥ・フロート、ハイネカンブ、大学院学生 7、観測と計算助手 4、女性秘書 4、技術員 3、図書係 1 といった具合です。天文台では朝 10 時半のコーヒータイムになると、この 20 余人全員が一室に会して朝の挨拶をするならわしでした。台員中にその日、誕生日をむかえる人があると、コーヒーのほか特別にケーキがでます。4月29日朝のケーキは、ドゥ・ヤーヘル教授の誕生日でした。当日が日本での天皇誕生日であることを、上野先生から聞いて御本人はちゃんと知っていました。面白いことに、翌日の4月30日が、オランダのユリアナ女王の誕生日にあたります。ドゥ・ヤーヘル教授は、1921年、北海に点在する一つの小島テクセル島の寒村に生まれました。オランダの国は、ライン、マース、スヘルデの3つの河から流れ出した土砂が、北海の潮流で押しかえられてできた島や三角州がつながってきた国です。風波の作用でできた砂丘がハーグから北の方へのびていますが、北側では一連の島々に分裂されています。オランダにそんな島があったのかと、ドゥ・ヤーヘル教授の出身地を聞いて始めて知りました。(もっとも、オランダ人は日本という国はアジア大陸の東端の小国だと思ひこんでいます。日本が4つの島からできていると聞いて皆な驚いていました)

ドゥ・ヤーヘル教授は1952年の“Hydrogen Spectrum of the Sun”の学位論文によって、一躍、太陽物理学者として名をあげましたが、1959年のHb. d. Phys. 52巻のarticleに見られる編集能力は超人的なように思われます。教授の机の上には、このarticle用の文献カードが2つの箱に数百枚もぎっしり分類して収められていました。他人の論文の読解力の早さに感心したことがあります。天文台図書室には、新着雑誌が1週間だけ特別の机に並べられていますが、これは帯出禁止になっていました。しかし、土曜日の午後行ってみますと「借用人ドゥ・ヤーヘル」とかいて5~6冊が持ちかえられていました。ところが、月曜日の朝にはちゃんとととの机の上ののっています。土・日の2日間に(日曜日には家庭サービスもしているのに)こんなにたくさんの論文が読めるのかと感心しました。この、頭の回転の速さが1959年の著作を可能にしたのだと思いました。この著作が「教授論文」となって、1960年9月にはドゥ・ヤーヘルは教授に昇任されました。ユトレヒトの地方新聞でしようが、望遠鏡で観測中のドゥ・ヤーヘル教授の写真入りで、教授昇任がデガデカと新聞に報道されているのには驚きました。一般市民と大学教授との親近感は、日本におけるよりもずっと近いように思いました。教授になってからのドゥ・ヤーヘルの活動力は益々旺盛にな

りました。週一回はグロニンゲン大学へ往復5時間の通勤を遠しとせず出張講義に出掛け、ブラッセル大学の客員教授も兼任し、はてはヨーロッパ各国協力のspace scienceの機関作りも始めました。難波君からの最近のたまりのよると、ユトレヒトがその機関のセンターとなり、天文台のスタッフも数倍増されたそうです。ミネルト教授の言葉をかりれば、「何時ユトレヒトに居るか聞いた方が簡単だ」といわれるほど、相変らずドゥ・ヤーヘル教授はヨーロッパ全土を駆けめぐっているとのことです。1963年8月、ミネルト台長が70才の定年退官されたあとをひきついで、台長に就任したドゥ・ヤーヘル教授は、伝統ある「オランダの」ユトレヒトを、「ヨーロッパの」ユトレヒトにしようとする意気込みを感じる位です。

学問の国際協力という意味では、ドゥ・ヤーヘル教授の愛想のよさと万人好みの国際性が大いにプラスしています。ユトレヒトで私に与えられたテーマ“ b_n の計算”にしても、まづ世界各国の主要学者に回状を送り、自分の計画を知らせてそれぞれの学者の意見をもとめ、それらを参考にして最終の研究計画を立てるといった具合です。トーマス(米)、ベッカー(仏)、シートン(英)、ドゥ・ヤーヘル(和蘭)という天文学の「NATO組織」もできているようでした。例えば、電子の衝突断面積にどれを使うべきか迷えば、手紙一本でシートンから最新知識を得ることができます。こんなことのできるのはヨーロッパならではの痛切に感じました。そんなわけで、ユトレヒトには各国から若い人達が1~2ヶ月の「武者修業」にやってきます。私の滞在中にも、トーマスの弟分のポターシュ、孫弟子のジョンソン、ベッカーの弟子のカンデルと応待にいとまもないほどでした。

こただけ多忙でありながらも、ドゥ・ヤーヘル教授の研究活動は少しも劣えません。一度にいくつもの問題をたえず考えているとしか思われません。ワラ半紙にサラサラと何か書き下せば、翌日には新しい論文が1つ誕生しているといった早わざの持ち主でもあります。教授就任後、天文台別館に3階建てのビルを獲得し、そこに教授室をもうけて移転するとき、廊下になげ出された幾種類ものリプリントの山を見て驚かされました。(前頁の写真はこの新教授室での光景です)

ドゥ・ヤーヘル教授の住いは、天文台から4kmほど離れたある運河沿いの長屋住宅で、ここはフィリップス電器会社経営の借家だそうです。非常に家庭的な感じをうける温厚な奥様と、中学生位をかしらに4人の子供さんの6人家族です。毎朝、奥様手製のサンドウィッチをつめこんだ、裁縫箱のような弁当かんを古びたカバンに入れて、あの長身の体での自転車通勤の姿が、今も目の前に思い浮かびます。